

新島八重ものがたり
一わたしらしく生きる一

講演	山下 智子【やました・ともこ】
講師紹介	新島学園短期大学宗教主任 新島学園短期大学キャリアデザイン学科准教授

「アーモスト・サマープログラム」

皆さん、おはようございます。朝の1限目から、学生の皆さんは眠い方も多いだろうと思いますけれども、大勢お集まりいただきありがとうございます。ご紹介いただきましたように、私もこの同志社大学の卒業生です。「同志社スピリット・ウィーク」、同志社の精神を確認する、そうしたときに母校にお招きいただきまして、本当にうれしく思っています。できたばかりの良心館に初めて来ました。昨日、地下鉄を降りると今出川駅の北側と良心館がつながっているという噂を聞きましたので、そこを通過してきました。大きな教室なので、少し皆さんが遠いのが残念ですが、お話をさせていただきたいと思います。

はじめに、私が皆さんの先輩で、同志社大学の出身であることについて、お話をさせていただきます。「同志社スピリット・ウィーク」にピッタリの思い出の写真を持ってきました。ある場所で学生時代に撮った写真です（資料①）。どこで撮影したと思いますか。実はこの写真は、「アーモスト・サマープログラム」のときのものです。私は3回生のときに、新島襄が留学したアーモスト大学で、ひと夏語学研修をしながら過ごすという機会を与えられました。30名ほどの仲間たちと学部・学年を超えて参加しました。なぜこの写真を持ってきたかというと、実は私は積極的な理由があってこの「アーモスト・サマープログラム」に参加したわけではありませんでしたが、振り返ってみて、本当に私にとってその後の歩みを支えるような出来事になっていると感じているからです。今日は多くの学生の皆さんがいらっしゃいます。日々、同志社という学校で、いろいろな出会いや経験、学びをされるなかには、すごく積極的に取り組めることもあれば、単位のためしょうがないと思うこともあるでしょう。楽しいと思うこともあれば、楽しめないこともあるでしょう。でも、しょうがないとか、楽しめないと思う瞬間も含めて、きっと、今日のこの時も含めて、皆さんが10年あるいはもっと経って振り返ったときに、ここで得た何かが、その後の皆さんの一部になっていくということを私は経験から感じています。ひと夏過ごした後に、アーモスト大学でお世話くださった学生スタッフの方が、参加者一人ひとりにちょっとした賞状のようなものをくれました。「あなたのここが素晴らしい」ということを称えるため作ってくれたのです。私はどんな賞状をいただいたと思いますか。現在私は、同志社大学と同じ新島精神を分かち合う新島学園短期大学というところで教えていますけれども、学生たちが賞状の話を聞くとびっくりします。私がいただいた賞状というのは「Queen of Silence」「一番静かだったで賞」というものだったのです。この私からは想像がつかないという方が多いのですが、当時は多くの人のなかで何を話していいのか、どう振る舞っていいのか、ちょっと居心地悪く感じながら皆さんについていくタイプでした。でもそのことも含めて、本当に同志社という学校で、新島襄の精神を学びルーツを辿る機会を、多くの仲間たちとともに与えられたことは幸せだったと思います。今はわからなくても良いのです。5年後、10年後、あるいはもっと先に振り返ったときに、「同志社で学んでよかった」とか、新島襄の生涯、あるいは今日は八重さんの話をしたいと思っているのですが、八重さんの生涯を知ったことは意味があったと感じていただければうれしいとお話をしています。

不思議なつながり

もう少し私の自己紹介をさせていただきます。私は福島県生まれで、母方のルーツが八重さんと同じ会津です。さらに、私はいまだに本籍地が兵庫なのです。出石という所です。大河ドラマ「八重の桜」を見ている方はご存じだと思いますが、八重さんの最初の夫・川崎尚之助という方が、実は出石藩の藩士です。この方は会津に行って蘭学の先生をしていました。偶然なのですが、いろいろな接点があるわけですね。それだけではありません。私は、会津若松教会という、八重さんの故郷に建てられた新島夫妻ゆかりの教会で牧師をしていました（資料②）。「女性の牧師っているんですか」と時々聞かれますので、あまりイメージがないかもしれませんが、女性の牧師もいるのです。会津若松教会は、1886年に新島襄が最初の信徒14名に洗礼を授けたところから始まりました。八重さんの故郷に建てられたこの教会で、私は初めての女性牧師でした（資料③）。男性の仕事と思われがちな仕事を、新島夫妻ゆかりの大切な教会で私がするということに、八重さんの生涯から励ましを受けました。その後、人生というのは不思議なもので、学校の先生だけでは絶対にならないでおこうと思っていた私が、新島襄の「新島」を頂戴して新島学園と付けられた短大で現在働いています。新島学園は太平洋戦争後に、新島襄の教え子、あるいは影響を受けたクリスチャンが中心になって、新島襄ゆかりの地・群馬に建てられた学校です。

このなかに群馬出身の方はいらっしゃいますか。その方々はこの札を見ると胸がキュンとするかもしれません（資料④）。群馬には「上毛（じょうもう）かるた」というご当地かるたがあります。戦後に群馬で育った群馬県民ならば、必ずと言っていいほど知っているものです。そのなかに「平和の使徒（つか）い 新島襄」という札があります。ですから、群馬県民は新島襄のことをほとんどの方が知っています。大学時代、群馬出身の友人に、「群馬の人は上毛かるたがあるから、みんな新島襄のことを知っているよ」と言われたとき、嘘だろうと思っていましたが、群馬に行ったら本当でした。群馬の方は本当に上毛かるたの話題が好きです。

群馬には、新島襄、八重さんゆかりの場所が複数あります。たとえば、日本キリスト教団安中教会（資料⑤）や、新島家旧宅と呼ばれる、新島襄の両親が住んでいた家などがあります（資料⑥）。旧宅は新島襄がアメリカから戻ってきたときに両親と涙の再会をした場所です。いずれもよく学生さんたちとスタディーツアーで訪問する場所です。

皆さん、今からでも遅くないので、新島襄が脱国した函館の地を訪れる「函館キャンプ」など学校主催のルーツを辿る旅に、遊び半分で結構ですし、別に新島襄のことを好きでなくても結構ですので、参加してみてください。後になってそれが自分の生き方において、きっと意味をもってくると思います。

これまでの人生を振り返りますと、私もそういう企画に参加したことがきっかけとなり、新島襄や八重さんを生かしていた何か大きな力が、私を二人に近づけているように強く感じています。

八重さんの生涯に

励まされる

そうした歩みのなかで、昨年、本を出しました。八重さんの本です。八重さんの生涯で、八重さんが会津時代に男装断髪で戦ったことは、興味深い話です。しかし八重さんの生涯はそれだけではありません。その後、我々が新島襄先生と出会い、襄が亡くなった後も、長生きされた方です。80年を超える生涯ですから、語り尽くせないさまざまなことがあるはずです。だから私は、八重さんが襄と出会って以降のことを一生懸命書きました。私は牧師でもありますし、今日はキリスト教のクラスでの講演ということもありますので、襄と出会って以降の八重さんの生涯を、八重さんとキリスト教の関係、八重さんの信仰などに焦点を当ててお話ししていこうと思っています。今日、私の話にピンとこない方もいると思います。それでもいいと思っています。けれどもいつか、皆さんが自分らしく生きられないような、あるいは、自分らしさって何なのかということが分からなくなってしまうような瞬間に、八重さんの生き方が皆さんを励ましたくえたらいいなと思っています。

八重さんに関する本は、たくさん出版されています。多くの本の表紙は、八重さんが鉄砲を持った姿とか、ドレスを着た姿の写真です。私の本の表紙は、他の本とは、全く趣が違います。なぜかという、八重さんがどこに写っているのか分からないような写真を表紙に使っているからです。そんな集合写真を使ったのは、なぜだと思いますか。これは同志社女子大学の前身である同志社女学校の創立時の学生さんと、八重さんの集合写真です（資料⑦）。写真を見ると、八重さんのこの右手の動作が、とてもよく八重さんという人の一面を表しているように感じられます。当時は写真を撮ることは特別なことだったでしょうから、皆お澄まして写っています。ところが、八重さんの隣の少女、顔を見る限りでは一番幼く、おそらく初めての写真撮影かと思われるような少女は、緊張していたのか、怖かったのか、とてもこわばった顔をしています。しかもこの足元を見てください。こんなに足を開いて写っています。そんな少女の手を八重さんはギュッと握って「大丈夫よ」と励ましているようす。つまりこれが、私が私の本に込めたメッセージです。八重さんの生涯というのは、この写真が表すように、後に続く者を励ます力があると私は感じています。だから「あなたはあなたのままで大丈夫。私が私らしく生きたように、あなたもあなたらしく生きなさい」と八重さんから言われているような、この写真を表紙に使いました。

八重の生涯の三つの時代

少し具体的な話に移っていきましょう。八重さんは86歳で亡くなっていますので、当時としては非常に長生きです。幕末に生まれて明治・大正・昭和と駆け抜けた方です。その86年の生涯は三つに分けて考えるというのが一般的ですし、覚えやすいです。最初の時代は「武士の娘・山本覚馬の妹としての時代」です。お生まれになったのは、1845年12月1日です。新島襄の2歳年下ということになります。この最初の時代は、新島襄と結婚するまでの30年間です。この期間の八重さんを表す出来事は、1868年、戊辰戦争のときに、女性でありながら男装断髪で銃を持って、鶴ヶ城に籠城して戦ったということでしょう。

八重さんの実家、山本家は、砲術師範といつて会津藩士に鉄砲や大砲を教える家柄でした。だから八重さんも女性でありながら、鉄砲が上手だったのです。非常に男勝りな活発さ、たくましさそのままに、戊辰戦争のときには活躍されました。今朝、来る前にテレビをつけておりましたら、「八重の桜」の予告で、八重さんが「（弟、三郎の仇を）私が討つ」と叫んでいるシーンが流れていました。八重さんには、山本覚馬という同志社の創立にもかかわった非常に優れたお兄さん、親子ほど年が離れており、影響をとても受けたお兄さんのほかに、何人か兄弟がおりました。八重さんが戦った理由は、弟の三郎さんが鳥羽伏見の戦いで死んでしまったからです。八重さんは三郎の代わりに自分が戦い仇を討とうとしました。

しかし会津藩は、籠城戦をはじめて1ヵ月後に、新政府軍に負けてしまいます。それから、八重さんは山形米沢の知人を頼って苦労した後に、お兄さんの覚馬が京都で生きているということが分かった、覚馬を頼って京都にやってきました。そして新島襄と出会います。それ以降が「新島襄の妻としての時代」になります。1876年の1月3日に襄と結婚します。八重さんが30歳、襄が32歳のときでした。

八重さんは、その前日に洗礼を受けてクリスチャンになっています。キリスト教プロテスタント式の結婚式も、洗礼式も京都では初めてだったと言われています。記録を見ると、その前の年の夏にまず裏の方が八重さんを気に入ったようです。やがて裏と婚約すると八重さんは当時勤めていた「新英学校及び女紅場」を一方向的に解雇されます。憤慨する裏に対して「福音の真理を学ぶ時間が増えるからいいわ」、つまり「聖書、キリスト教の勉強ができるからいいわ」と、サラッと saying のけて裏の心をさらにとらえました。そういう経緯で結婚したのです。

実は裏の妻だった時代というのは、そんなに長くありません。14年間です。新島裏は1890年1月23日に神奈川県の大磯で、同志社を総合大学にすることに奔走するなか、志半ばで倒れて亡くなりました。けれども、この時代の八重さんは、新島裏と出会い、キリスト教の新しい考え方と巡り合います。「クリスチャンレディー」と言われることもあります。裏とともに男女平等のキリスト教的な夫婦であろうとしました。ところが時代を先駆けすぎてしまって理解されず、悪口をたくさん言われました。悪妻だとか、あるいは、徳富蘇峰という新島裏の教え子には、和洋折衷の姿を鵜（ぬえ）だと悪口を言われました。この時代は裏の妻として新しいキリスト教の世界に飛び込んで、それを自分の生き方のなかでも実践してこうとした時代ということになると思います。

そしてその後が実は一番長いのですが、一番知られていない部分ではないかと思います。三つ目の時代区分は、新島裏の死後、1890年から八重さんが亡くなるまでの1932年までの42年間です。八重さんは、京都御所の東側にある新島旧邸と呼ばれる和洋折衷の素敵な建物に一人で暮らしていました。この時代の目立った活躍が二つあります。まず「篤志看護婦」、ボランティアの看護師として日清、日露の二つの戦争に従軍し、傷ついた人びとを支えたその働きです。女性が社会のなかで個人として、つまり妻としてではなく、娘や母としてでなく、新島八重個人として働くということがあまりなかった時代に、八重さんはそれをしたのです。もう一つの活躍は「茶道師範」です。新島裏が亡くなって数年後に裏千家に入し、短期間で師範の資格を得ています。ですから八重さんというのは本当に集中力があって、やろうと思ったことはちゃんと自分のものにする方ではないかと思います。茶道は、江戸時代には男性の知識階級のたしなみと書かれていたものでしたが、現在は、むしろお茶と言えば女性のお稽古事と考えられます。このような道を女性のために開いていった数少ない女性師範の一人であったと考えられます。

「武士の心」「信者の心」

この三つの時代の区分をよく頭に入れながら、今日、「わたしらしく生きる」ということをテーマに、八重さんがなぜ八重さんらしく、会津時代を土台として、でもそこでストップしてしまうことなく、その時々でやるべきこと、取り組むべきことをみつけ、86年間、見事に生きることができたのかということに話を移していきたいと思います。

結論から言ってしまうと、やはり裏と出会ったことによりキリスト教の心を自分のものにしていったことが、裏が亡くなった後の晩年、八重さんらしく生きるための大きな力になっているのだと思います。新島裏の妻であった時代の14年間、八重はクリスチャンレディーと言われることもあります。しかし洗礼を受けたからといって、生き方がいきなりガラッと変わるということは、考えにくいことです。もちろんそれまでとはいろいろなことが変わっていきませんが、人間ですからそんなに急に大きく変わるものではありません。八重さんともうでした。

八重さんというと、とかく戊辰戦争当時、鉄砲を持つての勇ましい活躍が目目されるので、「武士の心で最後まで生きた」と思われがちです。本当にそうなのでしょう。新島裏と出会ったこと、キリスト教と出会ったことは、八重さんの86年の生涯に本当に影響を与えていないのでしょうか。1885年、結婚して9年ほどたったとき、裏はアメリカから、八重さんにこういう手紙を送っています。「己を愛する者の為に祈るのみならず己の敵の為に熱心に祈り、（中略）何卒武士の心ばかりにては足らず、真の信者の心を以て主と共に日々歩み被下度奉希候」（新島裏全集編集委員会『新島裏全集』3 同朋舎出版 1987年）

八重さんはクリスチャンレディーとして自分でも努力して、裏とともにそれらしく振る舞おうと日々積み重ねて歩んでいたのですが、新島裏の目から見たら、まだまだクリスチャンとしては物足りなく、武士の心で生きている面が強かったのだと思います。結婚9年経っても、変えられないこともあったことを示しています。

どういう点について、八重さんはクリスチャンとしてはまだまだだと新島裏に思われてしまったのでしょうか。この手紙の文章からも分かるように、八重さんの敵に対する態度が、裏からすると気になっていたのではないかと想像がつかます。ちなみに裏が言っていることは、非常にキリスト教的です。新約聖書にはイエスのこういう言葉があります。「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」（マタイによる福音書5章43-44節）この聖書の言葉を踏まえて八重さんに対して裏は「あなたが敵と思う人のために一生懸命祈って、武士の心だけではなく、ぜひとも信者の心を強め、深め、大きくして歩んでほしい」ということを伝えようとしていたのです。

では、八重さんの敵とは、いったい誰だったのでしょうか。クリスチャンらしくキリストの教えに従って生きていこうと、努力している八重さんにとって、どうしても受け入れ難い敵とは誰だったのでしょうか。それは、まさに大河ドラマのシーンと重なるのだと思います。「弟の仇は私が討つ」と八重さんは叫んでいました。弟を殺した戊辰戦争時の敵が八重さんにとつての敵だったのではないのでしょうか。八重さんは、そのときに父親も亡くしていますから、大事な弟やお父さんの命を奪った薩摩や長州の人びとに対しては、その人が自分の家族を殺したわけではなくても、やっぱりどこか素直になれないものがあつたと思います。当時の同志社には薩摩や長州の出身の方もいたので、八重さんの敵とはこの人たちのことだったのかもしれない。

約束の握手

自分の敵を愛することがなかなかできない八重さんにとって、一つのきっかけになる出来事がありました。「裏の最晩年のころであつた」と八重さん自身が亡くなる直前に回顧していることですが、裏と八重さんは固い握手を交わしながら一つの約束をしているのです。こういうものです。「よほど晩年になりての頃裏はある感念にうたれたるおもゝちにて私の手を堅く握りて申さるゝには、『夫婦相愛の間柄とても永き月日の間には時に意見の相違は免れがたきものなれば今更のことではないが、お互に心棒して忍耐の徳を養いたいものだ、其約束のかためとして茲に握手を求めたのだ』。それ以来は従来にいやまして忍容の修養をつづけ夫婦間のみならず、弘く人類愛の根本義としてその約束を堅く守り、始終平安の日常生活をいとなみ居るのである。」（同志社社史資料室『追悼集』VI 同朋舎 1993年）本当に裏と八重は親しい夫婦、愛し合った夫婦であることがいろいろなところから垣間見えるのですが、それでもお互い意見の合わないことは多々あったでしょう。たとえば晩年の裏は、医者からドクターストップがかかり、あまり無理してはいけないと言われているのに、同志社のために無理をして出かけて行きます。八重さんはそういう裏を見守っているのですから、きっと「無理をするな」と言いたいでしょう。一方で裏は、「止めてくれるな」と言いたいでしょう。でも、どうでしょう。大事な人にギュッと手を握られ、目をじっと見られて「これからは、お互い意見が合わないことがあっても、お互い忍耐をして広い心でやっていこうね」と言われたら、そうしなきゃと思いませんか。しかも、八重さんの場合はそれを裏との間のことだと受け止めたかったのです。もちろん裏との間もますますお互いに広い心で約束しましたが、さらに「ああ、これからはますますすべての人に対して心広くやっていこう」と決心して、死ぬときまでそう心がけてきたと八重さんは晩年に語っています。

この約束の握手以降、八重さんがどう変わっていったかということをも具体例でお話ししていきます。亡くなる直前、裏は無理をして同志社を総合大学にするために群馬にやって来ました。そこで具合が悪くなり、寝込んでいるときに八重さんから、薩摩の人たち、つまり戊辰戦争の敵側である人たちを自宅でのかるた会に招いたと、便りがあつたのです。

「すべての人を愛せよ」という教訓を絶えず実行していた新島裏は、この便りを大変喜びました。実は八重さんは、会津独自の板かるたというものが大変好きで、自宅に度々学生たちを招いてかるた会をしていました。ところが、このときまでは、戊辰戦争時の敵と思われる薩摩出身の人たちを誘わなかったのです。その学生たちが直接、八重さんに何かをしたわけではありません。ただ薩摩の出身というだけで、やはり素直になれなかったのでしょうか。しかし裏と約束の握手をして、八重さんは「私も変わらなくては」と考えるようになりました。裏が倒れた、本当に具合が悪くて死にそうだ、そういう状況のなかで八重さんが何をしたかというと、今までどうしてもできなかったこと、すなわち素直になれなかったその相手を裏が不在の家に招いたのです。

その後、残念ながら新島裏は満46歳の若さで亡くなりました。14年間の結婚生活でした。八重さんは気の強い人だと思われていますし、実際そうだと感じます。でもそんな八重さんは裏のことを本当に好きだったのだと、いろいろな事柄から垣間見ることができます。新島裏が亡くなった直後の八重さんの言葉が残っています。信仰面に関してのことです。深い悲しみのなかで八重さんは夫の裏のことを、「実に愛情厚き事歿死すまで又後世までも忘れ難し」と言っています。さらに、「信仰に富み、憐憫に富み、堪忍び、人を容すの力、すべて妻の学がべきこと計なり。実に厚情又言い難き情は、只だ神と妾と知る計なり」（『新島研究』No.8 同志社新島研究会 1956年）とあり、新島裏の信仰心、人徳の深さ、その心広く耐えること、人を許すこと、それが特に私が学ばなければいけないことだと、最愛の人を失った悲しみのなかで八重さんは語っています。補足しておきますと、この前の部分で八重さんは「裏のいる天国に私も早く行きたい」と言っています。八重さんは、どういうわけかどの時代でも誤解されがちです。「出る杭は打たれる」「長いものには巻かれよ」というこの日本の文化のなかではいつも生きづらい方なのです。もちろんそれに負けずに生きた方なのですが、そうした八重さんは「裏と私が本当のところ、どういう愛情で結ばれていたか」ということは神様が知っている」とも言っています。

「キリストの心をもて心とせよ」

新島裏を失った後、八重さんとはどのように生きたかについてお話しします。特に「裏と私の深い愛情の絆を神様が知っている」と言う八重さんにとっての神様、あるいは信者としてのありようはどうだったのでしょうか。新島裏の影響は間違いなく非常に大きいわけですが、その裏が亡くなった後について、たくさんある八重さんに関する本のなかには、「晩年は原点に回帰して武士の心がグッと大きくなった」「武士として最後は亡くなった」というように書かれているものもあります。本当にそうなのでしょうか。もちろん生まれ育った故郷のことや、子どものころに受けた教育というのはゼロにはなりませんが、果たして時が経つとともに裏のことを忘れてしまうような夫婦だったのでしょうか。

決してそうではない、ということが分かる一つの話をしましょう。新島裏ゆかりの地である安中に建てられ、新島裏が京都から足を運んで最初の信者30名に洗礼を授けたということから始まった安中教会での出来事です。安中から同志社に来て学んだ人も大勢いましたし、同志社の卒業生が安中教会の牧師を代々務めてきた関わりの深い教会で、1910年、新島裏が亡くなって20年の記念会がおこなわれたときに、八重さんはその会に参加された方から求められて、「キリストの心をもて心とせよ」という言葉をサラサラと書いて渡しているのです（資料⑧）。私も本を書きますので、時々「サインをしてください」と言われます。サインでしたら名前を書いたらよいわけですからすぐ書けます。しかしなかには、「先生のお好きな聖書の言葉を一筆添えてください」と言う人がいます。私の好きな聖書の言葉はたくさんありますが、なかなか咄嗟には出てきません。ところが八重さんは、サラサラと書かれたのです。それはやはり普段の生活で、そのことを常に覚えていたということだと思うのです。「キリストの心をもて心とせよ」というこの言葉は、もちろん聖書の言葉です。

「おのおの己が事のみを顧みず、人の事も顧みよ。汝らキリスト・イエスの心を心とせよ。」（日本聖書協会『舊新約聖書』1982年）これは文語訳の聖書、「ピリピ書」に記されている言葉ですが、これを八重さんはサラサラと書いたのです。これはやはり、八重さんという方は新島裏が亡くなって20年たっても、そういうことを考え、大切にしながら歩んで

いたという一つの証拠ではないかと思います。自分のことだけではなく、他者のことも思いやっていく、それがイエス・キリストの心、隣人愛であり、それを自らの心にするという言葉です。少し見にくいのですが、これが記念会の様子です（資料⑨）。中央で白い紙のようなものを持っているのが八重さんです。なかなか盛大な会で、午前の部、午後の部がありました。午前の部でも、午後の部でも八重さんは新島襄の手紙を朗読したり、闘病中の日記を読んだり役割を果たしています。やはり八重さんが語る襄の姿は、人びとの心をとても震わす何かがあったようで、この会堂内がすすり泣く声で満ち溢れたということです。会堂の外で撮った記念写真がこちらです（資料⑩）。右から、山室軍平、八重さん、J・D・デヴィス、小崎弘道です。さて、襄の死後20年たっても、聖書の言葉がパッと出るような八重さんであったということを確認いただきました。しかし、一つ示しただけでは、本当にそうだったのか。たまたまそうだったのではないが、あるいは教会向けに八重さんが、よく準備していたのではないかと思われてはいけいないので、もう少し証拠を重ねていきます。

「心を得天真」

1921年、さらに時が10年ほど経ち、八重さんが故郷の会津を訪ねたときに残した書です。「心を得天真」（こころわすればてんしんをう）というものです（資料⑪ 福島県立博物館所蔵、同志社社史資料センター所蔵『同志社談叢』第30号）。同じ言葉が書かれた二つの軸ですが、左が新島襄の書、右が八重さんが会津に行ったときに書いた書です。さすがに襄は祐筆の息子で字も堂々たるものです。八重さんも八重さんなりに個性が溢れる字だと思えます。八重さんは新島襄と同じ言葉をこのとき、故郷に残しています。「心を得天真」というのは李白の詩の一節ですが、キリストンとしては、心を和やかにすれば天真、つまり神様の御心が分かるといような意味合いで理解できるので、新島襄は好きだったのだでしょう。同じものを書いているなんて、襄のまねをしているだけではないかと思われるかもしれませんが、八重さんは何も考えずに、たまたま襄が残したから故郷でそれをまねたのではないかと。しかし、よく考えてみるとどうも違うのです。実は八重さんは会津にもう一つ書を残していました。確実にあったことは分かっていますが、残念ながら今、所在が不明になっており、早くどこで見つかってほしいのが本当に心から願っています。もう一つの会津に伝えられた書は「心の和きものその人は地を嗣がむ」という、聖書の言葉です。「心を和やかにすれば神様の御心が分かるでしょう」というものと重なり合うような言葉です。これは、今の聖書ですと、「柔和な人々は、幸いである、その人たちは地を受け継ぐ。」（マタイによる福音書5章5節）という言葉になっていて、八重さんは会津の人たちのためだからこそ、この言葉を残したことが分かります。

会津の人たちだからこそ、というのは、皆さん、ということだから分かりますか。八重さんとの共通点です。八重さんは、京都で長年暮らし、故郷を訪れたわけですが、故郷の人とどんな共通点をもっていたと思いますか。やはり戊辰戦争のことです。私が会津に住んでいたとき、会津の方々が「この間の戦争は」、話をしていました。それを私は、太平洋戦争のことかと思ったのです。おじいちゃんが戦争に行ったとか、そういう話なのかと思いました。でもよくよく聞いていましたら、「この間の戦争」というのは、戊辰戦争のことだったのです。びっくりしました。現在でもこんなふうに大きな出来事だということは、八重さんが1921年に故郷を訪ねたときには、もっとももっとその戊辰戦争というものはリアルだったでしょう。どういうリアルさかという、多くの愛する者たちの命が失われた、故郷が荒れ果ててしまった、焼け野原になってしまった、そういう痛み、くやし、恨みのようなものが、やはり八重さんと故郷の人の共通点、理解しあえる、共感しあえる部分ではないかと思えます。ただし、八重さんの場合は、その故郷の人たちに対して、「本当に悔しいですね。今からでも仕返ししましょ」とは言いませんでした。そうではなく、襄から教わったこと、自分自身がその悔しい気持ち、悲しい気持ち、敵を絶対許したくない気持ちを乗り越える助けとなったこと、つまり心を和やかにして、敵と思われる人に対してでも仲良くする努力をすることによって初めて得られる平和を、故郷の人にもなんとか伝えたいという想いだったのではないのでしょうか。会津の武士の心をよくよく表していると言われるのが、日新館の什の掟の最後の部分、「ならぬことはならぬものです」という言葉です。それは確かに非常に会津らしく、良いと思う一方で、一度敵になったら、「ならぬことはならぬ」、「絶対にあの人たちは許しません」、ということから脱することが難しいのではないかという気がします。しかし、八重さんはそういう武士の心を受け継ぎながらも、敵といわれる人たちを会に招くことができましたし、故郷の人たちに対して平和であれとのメッセージを残しています。

「聖人の心に照らす」

八重さんの武士の心、信者の心。皆さんは八重さんという方が襄が亡くなった後どういう心で、生きられたと思いますか。1928年、もう少し時代を追って見てみましょう。これは日本女子大学で八重さんが訪れたときに学生の皆さんに語った言葉のなかに出てくるものです。「髪容は、鏡に向かって直すことが出来ても、心の歪みは直らないものであります。それは聖書、聖人の心に照らした時に、初めて直れることであると信じてみます」（『家庭週報』956号 櫻楓會 1928年）と言っています。私たちは人間です。人間であるということは、自分ではどうにもならない部分があるということなのです。こういうふうによく生きたいとか、こんなふうにできたらもっといいのと思うことはありませんか。私は思っています。けれども、なかなか自分だけでは越えられないところがあります。たとえば人間関係ならば、誰だってみんなと仲良くしたいと思うでしょう。でも、人間関係は、皆さんの人生でも悩みのかなり大きな部分を占めませんか。それは恋人かもしれないし、親子かもしれないし、友人かもしれません。皆さんはいろいろある悩みのなかで、特に人とのつながりということで大きく悩むことはありませんか。自分で努力してもなんとかしようと思っても、なかなか乗り越えられない何かがあることが多いではないでしょうか。八重さんも、そういう経験があったでしょう。心の歪み、あの人と仲良くすべきだと思っても、もうだめと思うような歪みかもしれないし、もっと違うのかもかもしれません。「武士の心は素晴らしい」という話も、八重さんはこの時しています。でもそれだけでは、だめだと言っているのです。心の歪みというのは武士の心だけではどうにもならなくて、「聖人の心」、つまりキリストの心、キリストが伝えてくれた他者を思いやる心、自分のことだけではなく、他者を思いやって生きる心を知って、そのキリストの生き方や考え方というものを自分の生き方や考え方に重ね合わせ、照らし合わせていくときに、八重さんがやっとの思いでかたる会に薩摩の人たちを招いたことのように、初めて少しずつかもしれませんが一歩踏み出せるということではないでしょうか。

そんな八重さんが、亡くなる直前のお話です。実はこの話の前に語られているのが、新島襄との約束の握手の話なのです。「襄が亡くなる最晩年のときに、急に私の手をギュッと握って、お互い心広くあろうと言った。だから私は、それ以降の人生、襄に対してはもちろん、それ以外のすべての人に対しても、心広くあろうと努めてきた」、そういうふうに行った後でのことです。このとき、八重さんは、具合が悪くて寝ていましたが、お見舞いに来た人に対して、このように言うのです。「実は此間も看護婦さんが此うは蒲団を聊か不注意に取扱いました時、一寸小ごとを云へば云ふべき場合あるの遺訓を履行し、云心に云はれぬ平和を味わいました」（同志社社史資料室『追悼集』Ⅶ 同朋舎 1993年）自分が具合が悪くて寝ているときに看護婦さんの布団の掛け方が気に入らず、「もう、この人は気がきかないわ」と思うようなことがあったでしょう。さっさとひと言言ってやりたい気持ちにもなったわけですが、「あ、そうだった。襄と約束の握手をした。どんな人にも心広く接するのだった」と思って愚痴を言うのではなく、笑顔でその看護婦さんに接したのです。その後、なんとも言えない平和というのを味わったと言います。八重さんは気が強いということは、最後まで変わらなかったわけですが、それは意志が強いということでもあります。八重さんが、日々人に対してどのように接するかということを意志的に決めていたというのが、ちょっとした日常のエピソードからも、分かる部分です。

八重さんを支えた心

八重さんは、武士の娘として、今まさに大河ドラマで描かれている部分ですが、女性でありながら髪を短く切り、男の人の服装をしました。と言っても、ただ男の服を着たわけではないのです。弟・三郎さんが戦死してしまって、その遺品の服を着るのです。そして三郎の代わりに戦って三郎の仇をとろうとします。そういう活躍が非常に興味深いところですし、注目されることなのですが、八重さんは、それだけかというと、そうではありません。特に襄と出合って以降、八重さんの心にそうした戊辰戦争時の勇ましさだけではなく人生を決める何か、日々の生き方を方向付けるような何か加わったのではないかと思います。それは何かというと、それは新島襄と出合い、また襄を通してキリストと出合ったこと、さらに八重さんの生涯にとって大きかったことは、やはり新島襄が早くに亡くなったということなのです。新島襄がとても長生きしていたのなら、また、違っていたかもしれませんが、残念ながら襄が若くして亡くなってしまいました。その経験乗り越えて、「弟の仇は討たねばならぬ、私はすなわち三郎だ」、という敵を絶対に許さない心を上回るような大きな信者の心、敵を愛したい心が、だんだんと襄の影響で育まれていったのではないかと思います。

敵を愛すること、キリスト教という愛は、いわゆる恋愛感情の愛ではありません。人を人として大切に受け入れていくということですから、敵に対しても、あるいは自分が嫌いだと思う人に対しても忍耐して、寛容、柔和であるような心を八重さんは身につけていったのではないのでしょうか。

八重さんは大きな武士の心をもっていました。やはり鉄砲を持って戦うということも、普通の女性にはできないことです。今日はそのお話は、あまりしなかったのですが、会津戦争で戦った女性は八重さんだけではなく。他に男装して戦った人が複数います。中野竹子は、まさに八重さんのライバルとしてドラマにも描かれていますが、やはり勇ましい女性でした。中野竹子は、いよいよ城下が戦場になるといときに、一緒に薙刀（なぎなた）をやっていましたから、「八重さん、私と一緒に薙刀で戦いましょう」と、のちに娘子隊（じょうしだい）と呼ばれる女性たちのグループに誘います。ところが八重さんは友人の誘いをあっけなく断ります。「いえ、私は参りません」と。竹子は、「八重さんは、とんでもない卑怯者だ」と思うわけです。ところがその後、竹子は、あっけなく敵の弾に当たって死んでしまいます。残された妹やお母さんたちが、ほうほうの体で、八重さんが籠城しているお城に後から逃げこんで来るのですが、そのときに竹子のお母さんは、「八重さんが、どうして私たちの仲間に加わらなかったのか、とんでもない卑怯者と思ったけども、娘を失って初めて分かった」と言いました。八重さんは「私は卑怯者と言われることも分かっていたけども、鉄砲に対して薙刀では敵わないと思った」と言いました。八重さんは、そういう強い意志があったから周りに流されないのです。

それだけではなく、新島襄と出合って、そういう武士としての勇ましさだけでは乗り越えていけないものがあるということを知り、さらにキリスト教の信者の心を育きました。そのことが、戊辰戦争だけではなく、86歳まで続く八重さんらしい生涯を支える力ではなかったかと思えます。

私らしく生きる。誰もが私らしく生きたいと願っていると思います。けれども、どういうふうに生きたらいいの、何が自分らしきなのかと、悩めば悩むほど深みにはまっていて、周りに影響され右往左往しているなかで、本当に苦しくなってしまうときもあると思うのです。八重さんの場合は、誤解されたり、批判されたりということも、多々あった方ですが、悪口、誤解、批判に流されることなく、自分らしく生きた方であると私は感じます。それを支えたものが、やはり襄と出合って得た新たな八重さんの心、キリストの心、信者の心ではないかと思えます。

「神のよき友となれ」

これは最晩年83歳のときに八重さんが書いたものです（資料⑫）。「神のよき友となれ」という言葉を八重さんは、友人の讃美歌の見開きに、署名しています。半田善四郎さんという新島襄と親しく、同志社のために多額の寄付金をした方がいるのですが、そのお孫さんの善和さんという方、新島学園に寄贈してくだり伝わっているものです。もと新島襄の教えで八重さんが83歳だったころに同志社教会の牧師をしていた堀貞一さんの持たし物です。堀さんが、「八重さん、何か記念に書いてください」と言って、讃美歌を差し出したのでしょうか。とにかく八重さんは、「神のよき友となれ」という言葉を書き残されたのです。八重さんが85と数えて書かれていますので、実際には満で83歳のときのものです。

この言葉、あるいはこれが讃美歌に書かれているということからも、八重さんが本当に信者の心、キリストの心といわれるものによって支えられて、八重さんらしく生きたということが分かります。讃美歌に書かれているというのがポイントです。八重さんが86歳で亡くなられたときには、同志社女子大学の栄光館が完成しておりまして、そこで葬式をされました。山室軍平という、新島襄の教え子で八重さんと親しかった方が葬儀の追悼説教をされています。そのなかで、山室軍平が八重さんの愛唱讃美歌について触れています。「いつくしみ深き」という讃美歌で、式のなかでも歌われました。そのなかに「しゅのともとなりて」という言葉があります。八重さんは好きだった讃美歌から、讃美歌に何か書いてくださいと求められたときに、「主」というのは神様のことですから、「神のよき友となれ」という、八重さんなりのアレンジを加えて書いたのではという想像ができます。

「いつくしみ深き」という讃美歌を皆さんはご存じですか。よく知られた「いつくしみ深き」を思い出しますが、八重さんの愛唱讃美歌は違います。今も歌う讃美歌ですが、今は歌詞が少し変わっており、「みめぐみゆたけき 主の手にひかれて」と歌っています。この讃美歌のくりかえしの部分が、八重さんの時代には「いつくしみふかき 主の手にひかれて」という歌詞だったのです。八重さんは、この讃美歌を、本当に自分自身の日々を支えるものとして、口ずさむこともあったのではないかと思います。だから「主の友となりて」という言葉の「主」をより具体的に「神」として、「神のよき友となれ」になったのではないのでしょうか。この「神のよき友となれ」という言葉は、八重さんが私たちに、80数年生きてきた末に残してくれた一つの重要なメッセージだと思うのです。八重さんの心のなかにあり、その生き方を支えていたものを「神のよき友となれ」という言葉がよく表しています。

わたらしく生きる

八重さんの生涯を顧みたと、私たちが日々悩むように、八重さんをもって生まれた個性や、自分らしさというものを、どう生かして自分らしく生きていくかということに悩み、体当たりでぶつかった方だったと思います。それは戊辰戦争の時代もそうでしたし、新島襄と出会って結婚したころもそうだったと思います。その時々、度々理解されず、誤解されてしまうことが多々ありました。私たちは、周りの人に批判されたりするときに自分を押し殺してしまいがちです。本当はこう思うけれど、周りから浮かないようにだまっておこうというように、自分らしくないと思いながら、とりあえず周りに合わせる人が多いです。確かに周りの雰囲気も大事ですが、それだけではいけないと思います。自分自身の考え方をしっかりともったうえで、出会った人たちを大切にしていくということが、自分らしく生きることではないかなと考えます。自分を偽って相手とうまくやるというのは決して自分らしく生きていることにはならないのではないのでしょうか。その相手の奴隷にはなっているかもしれないけれど、隣人になったわけではないと思います。友というのは対等な関係です。だから相手に笑顔でいてもらうために無理をして自分を殺すことは、やはり対等な関係、友の関係ではないと思います。

なぜ、八重さんが周りの人に理解されないときも、それに惑わされることなく、他者に対して思いやりを忘れずに自分を生きることができたのでしょうか。それは信仰によってではないのでしょうか。神様が、目には見えないけれども、よき友としていつも自分を見守ってくださることに支えられて、八重さんはやはり生きてきたのだと思うのです。ですから、周りに理解されないからといって、もう何もしないと消極的になるのではなく、神様のよき友となろうとしました。神様のよき友となるとは、神様が喜んでくださるような生き方をすることです。だから八重さんは出会う人びとのよき友となろうとしました。そして思いやりの心、寛容の心をもって、女性として非常に先駆的な生き方をし、社会に貢献されました。

会津時代の八重さんが、一番皆さんにとって興味のあるところかもしれません。実際会津時代が目ざされがちなのですが、私自身は、その生き方がもっとも成熟したのは晩年ではないかという気がします。襄と歩んでいた時代は、まだ武士の心と信者の心の葛藤する時代でした。神様がお守りくださることを信じ、それによって広い心で敵も受け入れていこうと変わりつつある時代でした。それを経て、八重さんが襄を失い一人になったとき、たとえば、日清・日露戦争のときに従軍して篤志看護婦として働きましたが、傷ついている人がこの出身でも助け、もう敵、味方ということはありませんでした。また、茶道を通して、建仁寺の僧侶とやりとりもしています。まさにいろいろな価値観があるなかで、お互い分かちあっていくために一番大切だと言われている「対話」です。そういうことを八重さんは実践されていたのです。

いかがでしたでしょうか。八重さんの生涯、私らしく生きるということをテーマに、特に新島襄と出会って以降の八重さんの心の変化を丹念に見てきました。皆さんが、この講演を通して、あるいはこの同志社で新島襄や八重さんの生涯を学び、知ることによって、あるいは出会いや経験を重ねることによって、ぜひそれを私らしく生きる力としていただいて、5年後、10年後、さらに八重さんと同じように80歳を超えても本当に皆さんらしさというのを大切にさせていただくことをお祈りして、私のお話を終わりにさせていただきます。ありがとうございました。